学校だより

さいたま市立いろどり学園小学部・中学部
令和８年１１月２日発行　　第７号

一歩を踏み出す

校長　米玉利　優子

「いろどり学園の人って、みんなやさしいですね。入学前は不安がいっぱいだったけど、今はなくなりました。」後期転入学した中学生が私に話してくれました。「どうして不安がなくなったのかな」と私が尋ねると、こんな話をしてくれました。「『一緒にボッチャをやろう』と誘われた時、あまりやりたくなくて黙っていたら、『気が向いたらおいでね』と小学生と中学生が一緒に明るく言ってくれたのです。１度断ったから、もう誘われないだろうなと思っていたら、３日後くらいにまた、声をかけてくれたのです。ちょっとやってみようかなと思って行ったら、先生も『よく来たね』と笑顔で言ってくれて…それから、一緒にボッチャをやることが増えて、何だか学校が楽しくなったかな。」そう話してくれた中学生は少し恥ずかしそうに笑いながら、私とハイタッチをしてくれました。行ってみようと一歩を踏み出したからこそ生まれたこの笑顔と、このようなあたたかさをもつ子どもたちが、いろどり学園の宝だと改めて感じ、思わず「ありがとう」とつぶやいてしまいました。

10月19日（月）、20日（火）には、小学部6年生が日光へ修学旅行に行ってきました。出発の朝の子どもたちの表情と張りつめた空気から「勇気を出して一歩を踏み出してみたけれど…」という子どもたちの精一杯の思いが伝わってきました。準備の段階から「お風呂はみんなと一緒に入れないかもしれない」「一人になりたいときは、どうしたらいいのかな」「寝る時も心配だから行きたくない」など、子どもたちはたくさんの不安を話してくれました。その一つひとつに、担任も登校キャンパスの教員も引率する教員も真摯に向き合ってくれました。そして、いよいよ始まった修学旅行。野生の猿に出会って大騒ぎ…ゲームをして大笑い…みんなで入ったお風呂からは大きな歌声も聞こえてきました。グループ行動をする際には、友達の様子に気を配りながらあたたかい声をかける姿も見られました。そして、20日が誕生日の友達に、皆で「Happy Birthday」の歌を贈る姿を見た時、私は思わず涙が溢れました。不安があってもいい。自信がなくてもいい。最初の一歩がどんなに小さくてもいいのです。でも、その一歩を踏み出した先には、新しい自分との出会いが待っているのだと、小学部6年生の子どもたちは、私たち大人が忘れかけている大切なものを教えてくれました。

10月29日（木）は、「つぼみの日」でした。GS の授業で中学部1年生が自分で考えた先生紹介のスピーチを小学部6年生が真剣に聴きました。チャットには「かっこいい！」「中学生になったらこんなふうに話せるのかな」などという感想が飛び交いました。一緒に活動したり、図工と美術の違いを質問したりするなど、あたたかな交流が生まれました。いろどり学園では、年齢や学年を超えて自然と関わり合う姿が日常的に見られます。こうしたつながりは、本校の大きな強みです。一人ひとりの心が動く、異学年との交流の時間を今後も大切にしていきたいと思います。

誰かと一緒に遊ぶ楽しさを感じられたこと、初めての仲間と笑い合えたこと、かっこいいなと思える先輩に出会えたこと。その一つひとつがかけがえのない成長なのだと思います。今は立ち止まる時でも大丈夫です。子どもが自分のペースで歩む時期こそが大切であることを私たち大人は決して忘れることなく、心をかけ、言葉をかけ、焦らず、比べず、その子なりの一歩を共に喜べる教職員であり続けたいと思います。そして、その小さな一歩こそが、自分の「いろどり」につながっていくことを、子どもにも大人にも伝えることが、本校の使命であると信じ、力強く歩んでまいります。

保護者の皆様、地域の皆様には、子どもたちの踏み出した一歩を価値づけるとともに、私たち大人も一歩を踏み出せる人間であり続けられるように…今月もあたたかいご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。